

先進校に学ぶ
キャリア教育
の実践

CASE 2



福岡県公立
古賀高校
(2009年より古賀竟成館高校)

卒業生の実態把握をきっかけに
キャリア教育の視点で学校の活動を見直す

取材：文／永井ミカ 撮影／安河内厚

Outline

キャリア教育の全体像

勤労観を育てる講演会を
3年間で9回開催

福岡県古賀市、福津市、新宮町の2市1町が組織する高等学校組合によって運営される公立古賀高校。普通科と総合ビジネス科に分かれ、生徒の進路は大学、専門学校、就職と多彩だ。

同校のキャリア教育は2007年度にスタートしたばかり。文部科学省によるキャリア教育の定義（児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それにふさわしいキャリアを形成していくた

めに必要な意欲・態度を育てる教育）に忠実に、国立教育政策研究所の示したキャリア発達にかかわる諸能力（人間形成・情報活用・将来設計・意思決定能力）を意識して、学校の教育活動全体を通して、組織的かつ系統的にキャリア教育に取り組んでいくという方針で、今、仕組みづくりに励んでいる。

まずは07年3月に「文部科学省キャリア教育調査研究指定校」に手を挙げた。そして、指定を受けたのが10月。予算がついたことで、かねてからの懸案であった外部講師による講演会が開けることになり、同年の11月に急遽「第1回キャリア講演会」を開催。12月、1月にも続けて実施し、これを足がかりにキャリア教育が本格始動したのである（図1）。

外部人材の活用

卒業生動向調査

キャリア教育生徒推進委員会

>> School Data

普通科・総合ビジネス科／1962年創立
生徒数／598人(男子276人、女子322人)
進路状況(2007年度実績)／大学 30.2%・
短大 17.2%・専門学校 19.4%・
就職 28.0%・その他 5.4%
福岡県古賀市中央2-12-1
TEL 092-942-2161

同校がキャリア教育に着手した大きな理由のひとつに、昨今の生徒たちの勤労観の欠如が挙げられる。その場しのぎの進路選択を許してしまったりという自戒もあり、今の社会の第一線で働く人たちに語ってもらうキャリア講演会には力を入れている。まずは人選（図2）。業種が偏らないこと、そして仕事の内容ではなく、その人の生き方を語ってもらうことにこだわっている。就職浪人をしてまでもやりたいことを貫いた新聞記者、縁故で就職したものの学歴のないことの厳しさに直面し夜間大学に通ったという女性。彼女はリストラに遭った経験も語った。裁判官も経験したことのある弁護士は、講演ののちに本格的な模擬裁判の様子も見せてくれた。「どの講師にも夢を持つことや努力すること



進路指導主事
米原光章先生



教頭
長友陸富先生



総括教頭
馬場園茂生先生

の大切さを語ってもらっています。回を重ねるうちに、自然に共通点に気づいてもらえれば」というのは進路指導主事の米原光章先生。講師は同校の教員が知人にあたりたり、ハローワークに相談したり、以前に講演を聞いた人に直接連絡をとるなどして集めた。事前学習や、講師と生徒によるパネルディスカッションも行いながら、生徒たちは3年間で9人の講演を聞く。

「外部人材や保護者も巻き込み「生きる力」の向上を目指す

この講演会をキャリア教育の柱のひとつとして、目指しているのは生徒の「生きる力」の向上だ(図3)。「全部を一度にやろうとせず、1学年ではこういう力をつける、2学年ではここまでと、学年ごとに着実に力をつけさせていきたい。目指すのは、スキルの向上ではなく、あくまでも生きる力の向上」と米原先生。研究指定を受けている3年の間に実現させたいことを7つの柱(図4)として挙げており、キャリア講演会のほか、キャリアアドバイザーの活用など、外部の人材活用も積極的だ。同校のアドバイザー榎崎辰雄氏は大手企業で社員研修などを担当した経歴を持つ人物。週2日、在校し、進路指導部と連携。3年生全員や希望者と面談をしたり、教員たちに民間企業の考え方をアドバイスするなど、なくてはならない存在になっている。総括教頭の馬場園茂生

先生は、外部アドバイザーの起用が成功した理由を「企業において、様々な業務を経験されており、もともと地元の方で、地域をよくしたいという思いが非常に強い。何よりも、働くことについて語れる人であるということが、我が校の方針にマッチしました」と語る。

そして、もうひとつ早々に達成したのが、進路説明会への保護者の参加率100%。欠席する保護者がいれば別の日に、また欠席者がいれば別の日にと、6回も7回も同じ保護者会を開催。全員に進路の現状などについて説明し、詳しい資料を配付した。この説明会は1学年と2学年の初めに開催。生徒の進路実現に向けて、保護者の協力と正しい情報収集を呼びかけている。

生活指導と学力向上で進路状況に大きな変化が

学校をあげてキャリア教育に取り組むなか、新校舎の建設も終え、2009年度からは古賀竟成館高校として新たなスタートを切る同校。しかし、今から10年近く前、学校の存続自体が危ぶまれる時代もあった。「放課後や夏期休暇中のグラウンドでは、人数の少ない野球部と陸上部が活動しているだけの寂しい学校でした」と、米原先生が当時を振り返る。進路未決定のまま卒業する生徒も少なくなく、地元議会では廃校を考える委員会もできた。

図1 キャリア教育に関する取り組み(2007年度)

	1年生	2年生	3年生
4月	教育合宿		
5月	進路説明会	進路説明会	
6月	学部探究授業	学部探究授業	進路相談会
7月		インターンシップ ■企業訪問	センター試験説明会 就職希望生徒説明会
8月	ボランティア活動	ボランティア活動	ボランティア活動
10月		進路ガイダンス	
11月	■第1回キャリア講演会	■第1回キャリア講演会	■第1回キャリア講演会
12月	進路発表会 ■第2回キャリア講演会	進路発表会 ■第2回キャリア講演会	進路発表会 ■第2回キャリア講演会 ■就職内定者セミナー
1月	■第3回キャリア講演会	■第3回キャリア講演会	■第3回キャリア講演会
2月			年金セミナー
3月		進路説明会	

※■は研究指定を受けてから急遽決定した取り組み

図2 キャリア講演会 講師と演題

年度	回数	講師	演題
2007年度	11月 第1回	営業職	「国際人としての生き方」-ビジネスマンという仕事と社会
	12月 第2回	新聞記者	「新聞記者になって良かったこと」-新聞記者という仕事と社会
	1月 第3回	弁護士	「今、思うこと」-弁護士という仕事と社会
2008年度	4月 第4回	アナウンサー	「何をどう伝えるか」-アナウンサーという仕事と社会
	11月 第5回	元大手企業女性総合職経験者	「今を生きる」-気づきの原点は失敗なり
	1月 第6回	税理士	「仕事に就くということ」-税理士という仕事と社会

このままではだめだ、と考え始めたものの何を
 していいかわからない。そこでとりあえず、01年
 に迎える創立40周年記念式典を成功させるとい
 う目標を掲げ、生徒たちの基本的な生活習慣を正
 す取り組みを始めた。服装指導、遅刻指導、あい
 さつ指導などを徹底的に行った。そして式典を
 無事に終えた後も、1年生全員部活動参加、礼
 法の授業の実施、基礎学力向上のための指導な
 ど、「生活指導」と「学力向上」、そして「進路実
 現」を3本柱に、さらに取り組みを強化した。
 その結果、進路未決定者の減少や大学進学率
 の上昇(図5)、資格取得者の増大といった成果
 が見え始めた。沈んでいた学校が、息を吹き返し
 たのである。

就職2年目で離職率36%
勤労観の欠如を痛感させられる

学校改革がうまくいっているかのように見えた
 06年のこと。卒業生の追跡動向調査(元クラス
 担任による電話調査)を実施してみると、大学や
 専門学校へ進学した者は、情報系や簿記系の資
 格取得率が低かった。また、就職した生徒は2年
 目にしてすでに36%もが離職していたことがわ
 かった。

「それなりにやってきたのに」…ショックを受け
 る教員たち。離職の理由を聞くと、人間関係の
 問題、条件の問題などが挙がる。そして企業から
 は「仕事に対する認識が甘い」と指摘された。服
 装を整え、あいさつを徹底し、学力を上げたけれ
 ど、勤労観は育たなかった。深く考えることもな
 く、卒業直前になってあわててその場しのぎの進
 路決定をしていた。進学や就職のさらにその先
 までは見据えていなかった。学校の指導に課題が
 ある…調査からそう結論つけた同校はキャリア
 教育に着手するにあたり、その基本方針のトップ
 に「働くことへの関心・意欲の高揚と学習意欲
 の向上」を掲げた。また、07年度から、英語、国
 語、数学での習熟度別授業や教育合宿、朝読書

図3 キャリア教育研究構想図

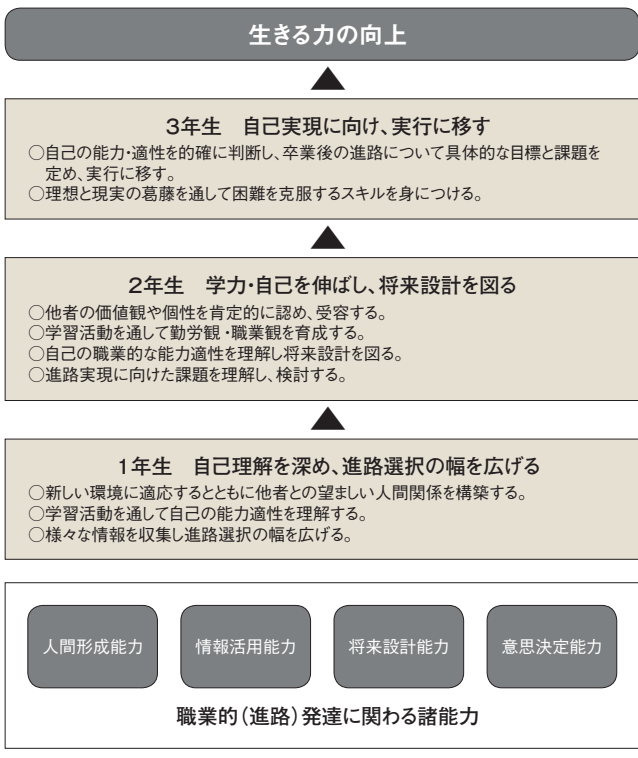


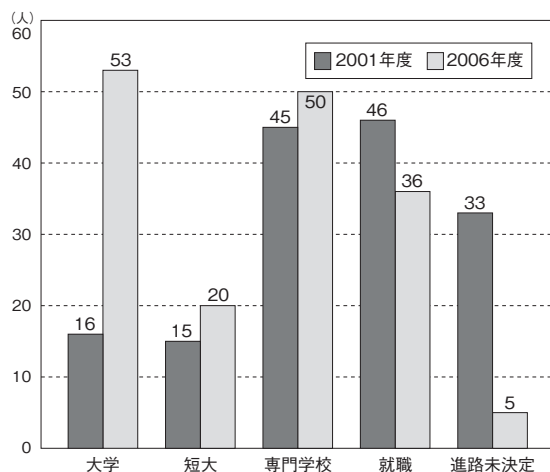
図4 キャリア教育研究内容の柱

1	学校教育活動全体における キャリア教育の展開	本校がこれまで築き上げてきたキャリア教育の成果を整理し、本校生徒の実態と社会の状況に応じた、効果・成果が上がるキャリア教育をすべての教育活動において充実、発展する。
2	外部の専門的人材 (キャリアアドバイザー)の活用	経験豊かな外部人材をキャリアアドバイザーとして任用し、生徒に対してキャリアアドバイスをを行い、社会人・職業人として自立していける能力や態度を身につかせ、生徒のキャリアプランの形成に役立てる。
3	キャリア講演会	地域社会において各方面で活躍されている方を講師として迎え、その方の職業を通して、仕事のすばらしさを知り、高校生として将来の職業について考え、よりよい高校生活を作り上げる。
4	生徒推進委員会による キャリア教育調査研究の 自主的活動	生徒のキャリア教育推進委員会を立ち上げ、①本校生徒のキャリアプランの意識調査、②全クラスでのキャリアプランニングの研究等を通して、生徒自らがキャリアプランニングに取り組む意識を醸成する。
5	社会人として通用する マナー教育の徹底	社会人として最も大切なものは、社会人としてのマナーであり、礼節であり、接遇能力である。このことが身に付いているか、付いていないかが、職場での人間関係や対人関係を大きく左右する。社会人として通用するマナー教育を徹底したい。
6	卒業生や中退者の 動向調査を通した キャリア教育の在り方	これまでの本校のキャリア教育の成果を確認、評価し、それを今後の指導に生かすため、卒業生や中退者の動向調査を行う。その結果を整理し、キャリア教育の在り方に関する指導に役立てる。
7	保護者へのキャリア教育に 対する意識啓発	保護者および生徒対象の進路説明会を実施する。



2009年4月より校名を古賀寛成館(こがきょうせいかん)高校に変更し、普通科に特進コースとベーシックデザインコースが新設される。上は新校舎完成予想図

図5 卒業生の進路状況(2001年度と2006年度の比較)



なども導入。教科学習もキャリア教育の機会とし、学校全体で取り組んで行くことを誓った。

「正直、最初は卒業後のことまであまり考えていませんでした」(米原先生)という反省のもと、追跡調査についてはその後も継続。キャリア教育の取り組みを始めるにあたっては、調査の内容を参考にした。例えば、「進路指導が受験の情報提供に偏っていた。もっと生き方指導をしてほしい」というのも、卒業生の実際の声にあったという。キャリア教育導入後の卒業生動向調査の結果は今後を待つが、生徒たちの意識の変化は教員たちも実感している。進路希望が明確になり、進学の原因なども考えたり語ったりできるようになってきた。そして、仕事をやめずに頑張っている卒業生たちの様子が、教員たちの耳に届いているようだ。

Close up ② 生徒推進委員会

講演会を職場訪問や

職業人インタビューの機会に

同校ではキャリア教育を始めるにあたって、生徒が活動する組織「キャリア教育生徒推進委員会」を立ち上げた。目的は生徒自身にキャリア教育を意識させ、自主性を育むことだ。現在のところ、同委員会は主にキャリア講演会にて活動。生徒会もこれをバックアップをする。

まず、講師が決まったら、委員会が講師の職場を訪ねて取材を行い、講師のプロフィールを作成。各クラス2人の学習委員がそれをクラスに持ち帰り、講演で聞いてみたいこと、質問などを生徒たちから吸い上げる。その内容をまとめて講師にフィードバックしたり、講演後のパネルディスカッションの台本を作るなどする。当日の進行も委員会のメンバーの役目だ。

職場訪問や職業人インタビューの機会を得られるというメリットがある一方で、「あらかじめパネルディスカッションの台本を作ることに關しては反省点もあります」と馬場園先生。「これまではまだ台本が必要な段階でしたが、今後は、これまでのパネルディスカッションの成果と反省の上に立ち、生徒が率直な疑問や意見感想を出せる内容にしたい」という。

Close up ③ 生徒理解

感想文や年6回の面談で

生徒の進路観の変化をキャッチ

また、教頭の長友陸富先生も語る。「生徒が主体的にディスカッションに参加できるようにするには、学校の仕組み自体を変える必要があります。『誰かが何かをしている。そのとき自分は何をすべきか』と常に考えるようなしなななを、学校生活のなかに取り入れたい。まだまだですが、最近では少しずつ自主性が育ってきました」

今後はキャリア講演会だけではなく、委員会の役割を増やしていく予定。彼らの協力を得て、独自の進路参考資料集を作っていきたいという。

そして、委員会や生徒会の生徒だけでなく、一般の生徒もキャリアプランについて日頃から意識できるように、常に書き振り返る指導を行っている。講演会や朝読書の感想、進路志望理由などが、また、総合的な学習の時間を使って生徒に進路作文を書かせ、各クラスの発表会で代表を選出。最終的に各学年数名ずつの代表による進路発表会を行っている。こういった取り組みを進めるうちに、自分で「キャリアノート」を作成し、進路実現に向かって努力する生徒も出てきた。

もちろん、生徒が書いたものは、生徒の進路観

自分の夢に向かって努力したい

秋永康祐さん 3年・前生徒会長(写真前列左)

講師の方とお話したとき、自分に夢や目標がなく、ただ何となく大学に進学しようとしているなど気づかされました。今は、営業職に就きたいという目標もでき、大学生活をどう過ごすのか意識していこうという心構えもできました。自分の状況や考え方がどんどん変わっていくなか、進路面談の回数が多いのが本当によかった。進路についてじっくり考えるいい助けになりました。

葉山忠宣さん 3年・前生徒推進委員長(写真前列右)

入学したときからキャリア教育が始まり、正直最初はめんどろだと思っていました。講演会の講師の方とお会いするのも緊張の連続でした。でも、親の商売を継ぐつもりのほかにも、いろいろな話は参考になりました。講師の取材で新聞社に行ったときに仕事の厳しさを感じたり、縁故の就職で苦労した方のお話では自分と重ねて考えることができたりと、勉強になりました。

肱黒正弥さん 2年・現生徒会長(写真後列右)

ぼくは転校生で、以前の学校にも講演会がありました。仕事の内容についての話が主でした。古賀高校の講演会では、人生を通しての話が聞けたので、とても心に響くものがありました。ぼくは腰を痛めて手術をしたせいで好きな水泳ができなくなり、やる気を失っていました。でも、講演を聞くたびに「自分の悩みは小さい。くよくよしていても仕方ない」と思うことができました。

古藤愛樹さん 2年・現生徒会書記(写真後列右から2番め)

講演会の講師やキャリアアドバイザーなど、いろいろな人が「進路を早く考えること」というので刺激を受けました。実際に、講演会の後には、友達同士の会話でも進路の話が多くなります。ぼくは父と同じ仕事をしたいので、そのために資格取得率の高い大阪の専門学校に行きます。やりたいことはたくさんあるけれど、父と一緒に働くのがいちばんの夢です。

高崎夏希さん 2年・現生徒会副会長(写真後列左から2番め)

小学生のときから幼稚園の先生になると決めています。それでも講演会は、いろいろな仕事を知ることができ、視野が広がってとてもおもしろいです。みんな苦しいことがあるんだとか、何をしようにしても信頼関係って大切なんだとか、あいさつって大切なんだとか、共通のことに気づけます。それを自分のことに置き換えて考えるようにしています。



が3年間でどう変化していくか、教員が伝えたかったことにきちんと気づいているかなどを調べた材料としても活用している。そして、取り組みの内容を見直すきっかけにもなっている。例えば、07年度のキャリア講演会で、国際的なビジネスマンや新聞記者、弁護士といった講師を招いたところ、生徒たちは話の内容に感銘を受けていたものの、講師が自分たちとは関係ない遠い存在であると感じていることがわかった。そこで、08年度の講師はフリーター(当時)の女性にも依頼。その後の感想文では「雲の上の人は頑張っ

て当然だと思ったけれど、身近な普通の大人もこんなに頑張っているんだということを知った」という趣旨のものが多かったという。加えて、生徒たちの心の変化をとらえるために、担任による面談は年に6回実施。学校改革を始めた頃から、結局は生徒一人ひとりをきちんとみていくことが重要と気づき、面談を増やしていったのだ。進路実現に向かう生徒の気持ちも切れないようこまめに働きかけ、適宜進路説明会も開催していく。面談では、担任が「学習」「学校生活」「進路」について書き込む面談シートを3年

間を通じて活用。これによって、担任以外の教員も生徒個々の情報を共有できるようになっている。古賀高校のキャリア教育は、在校生、卒業生の動向を常にチェックしながら進められていく、生徒の立場に立った取り組みだ。そして、必ず保護者も参加してもらおうという学校側の徹底ぶりに、保護者の意識も高まってきた。そんな同校の、これからの課題はさらなる自主性。新しい学校へと飛躍する今、自ら進んで動いていくということが、生徒だけではなく、すべての教職員にも求められている。

>> 古賀高校に学ぶ実践ノウハウ

- 学校が生徒に伝えたいことを、キャリアアドバイザーや講師にも語ってもらう
- キャリア教育の運営に生徒を参加させる
- 保護者全員に進路ガイダンスを実施し、生徒の進路実現に協力してもらう
- 在校生や卒業生への調査で学校が独自に抱える課題を探り、企画に反映させる
- こまやかな2者面談、3者面談を実施し、生徒の進路観の発達を途切れさせない